

暖地におけるアイリス球根の養成について (1)

岡 迫 義 孝*・高八重一純*

OKASAKO, Y. and TAKAHAE, K. On the Bulb Production in
Dutch Iris in the Warm Region of Japan. (1)

暖地産の早掘球根が、北陸産のものにくらべ促成能力が高いことは、阿部技官等によつて既に明らかにさ

* 宮崎県農業試験場

れているところであり、業界からのこれが生産に対する要望も大きいものがある。宮崎県においては、昭和32年度より年平均気温 16~17°C の沿海地滞を利用

し、アイリス球根の生産にのり出しているが、新作物であるために未知の問題点が多く、よつて本試験に着手した。供試圃場は年平均気温 16.7°C、砂質壤土の冬季乾燥しやすい畑である。

1. 植付時期に関する試験

材料及び方法 供試品種 ウェッジウッド (宮崎産)、木子 (種球) の植付時期及び大小と球の肥大との関係を知るために、0.4~8.0gm の木子を 1 球ずつ秤量し、各組が大中小をほぼ同じ割合に含むように 7 組に分け、9 月 10 日から 11 月 10 日まで 10 日間隔で 7 回に植えつけた。栽植距離 12×9 cm、植付の深さ 12 cm、収穫 5 月 13 日、1 区 50 球の 2 区制

成績及び考察 1. 植付期の早晚と生育経過

(1) 萌芽 (第 1 表) 9 月 10 日~10 月 1 日植は、ほぼ同時期の 11 月 1 日前後に萌芽した。従つて早植区ほど多くの日数を要したことになるが、平均気温をみると 9 月末日までは毎日 20°C 以上で、10 月はじめから 20°C 以下に下つている。この 20°C 以下に下つてから植えられた区は、いずれも 1 ヶ月内外で萌芽している。このことからして、早植区の発芽遅延は、地温の高すぎることによる障害ではないかと考え、9 月 10 日植区の未萌芽株の根を調査したところ、数 cm に伸びてはいたが褐色を呈し生気を失っているものが多かった。

第 1 表 萌芽日数

植付月日	平均萌芽月日	植付より萌芽までの日数と気温					平均気温
		平均日数	0.4~2.9gm	3.0~5.9gm	6.0~8.0gm	°C	
9.10	11.1.6	52.6	58.5	48.9	46.6	20.7	
9.20	10.31.0	41.0	45.6	38.3	36.3	19.5	
10.1	11.2.9	32.9	37.7	28.3	25.0	18.5	
10.10	11.10.0	31.0	35.5	27.7	25.5	17.8	
10.20	11.20.1	30.1	33.3	26.9	27.8	16.3	
11.1	11.29.9	28.9	32.9	26.5	26.2	14.5	
11.10	12.9.4	29.4	33.2	26.6	23.4	12.7	

(2) 萌芽後の生育 (第 2 表, 第 1 図) 生育のすみ方は、萌芽期の早晚に左右される。一般的傾向としては、早植区では概ね 3 月上旬に地上部の生長を完了し、これに代つてその頃から主球の急速な肥大が行われるが、4 月以降の肥大は緩慢となる。これに対し晩植区は肥大開始期がおくれ、従つて肥大が完了しない前に収穫されるということになる。

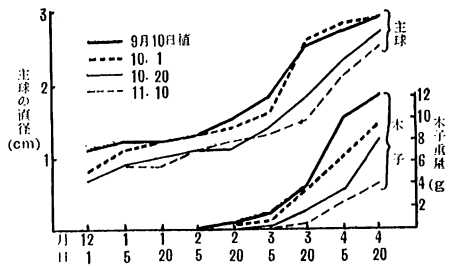
木子の着生は、9 月 10 日植では 1 月下旬頃からみられるが、本格的な肥大は主球と同じく 3 月上旬頃からである。

2. 植付後の早晚と収量 (第 3 表) 収量は萌芽期及び萌芽後の生育に左右され、萌芽期が同じ場合は肥大

第 2 表 草丈及び葉数

植付	12月		1月		2月	3月		4月
	1日	20日	10日	30日	20日	10日	30日	20日
草丈 (cm)								
9.10	30.0	36.0	49.6	56.7	71.0	88.7	95.4	98.0
10.1	27.2	33.7	50.9	53.7	67.5	88.0	91.9	95.5
10.20	12.1	23.2	30.4	38.2	53.1	68.2	79.8	85.3
11.10	—	—	18.9	25.9	38.8	54.8	67.3	76.3
葉数 (枚)								
9.10	2.2	2.3	2.5	2.7	3.1	3.5	3.6	3.6
10.1	2.2	2.4	2.5	2.7	3.3	3.5	3.5	3.6
10.20	1.7	2.2	2.3	2.5	3.1	3.5	3.5	3.5
11.10	—	—	2.5	2.5	3.1	3.3	3.3	3.3

第 1 図 球の肥大曲線



第 3 表 収量

植付月日	主球重量		肥大率	等級別割合			木子収量	
	植付時	収穫時		特以上	1~2	3以下	個数	重量
9.10	3.33 gm	19.53 gm	5.89 %	20.7 %	54.9 %	24.4 %	3.3 個	12.4 gm
9.20	3.34	19.54	5.86	16.4	58.8	24.7	3.4	12.6
10.1	3.03	18.14	6.00	12.2	63.4	24.4	3.3	11.4
10.10	3.47	19.01	5.48	20.0	56.5	23.5	3.1	10.8
10.20	3.38	17.81	5.27	17.8	46.7	35.5	3.0	9.5
11.1	3.28	16.18	4.94	13.0	44.6	42.4	2.8	8.5
11.10	3.27	14.69	4.48	5.6	45.5	48.9	2.6	6.3

率にも差がなく、萌芽のおくれる晩植区ほど肥大不良を示している。また、生産者の収入に直接影響を与える 3 等級以下の小球歩合及び木子収量においても同様の傾向がみられる。

3. 植付時における木子の大小と球の肥大との関係

本試験の結果について、植付時の木子重と球の肥大との関係を求めてみると第 4 表のようになる。即ち 10 月 10 日植までは差がなく、凡そ 2 gm 以上の木子であれば 1 等級以上の球に肥大し得るとみることができよう。また、植付期の如何を問わず 6 gm 以上の木子は、開花扁平球となる危険性があるものとみられる。従つて最適の木子重は 2~6 gm の範囲にあるものと考えられる。

第 4 表 木子重と肥大との関係

植付月日	等級	開花	特大			
			特	1	2	3
9.10	7.1 gm以上	5.1	3.9	2.2	1.1	0.9
9.20	7.7	5.7	3.9	1.7	1.2	1.0
10.1	6.5	6.1	3.9	2.3	1.0	1.0
10.10	6.0	4.3	2.2	1.8	0.9	0.9
10.20	—	5.7	4.6	2.2	1.8	1.2
11.1	6.5	—	5.1	3.6	1.8	1.6
11.10	7.5	—	5.6	4.3	1.7	1.4

結論 (1) 植付期の限界は10月上旬まで、それより早く植えても普通の年では増収とにならないが、また減収ともならない。年によると早くから秋冷の訪れる年もあるので、植付は9月中下旬頃行うのがよいと考えられる。

(2) 種球としての木子の大きさは、2~6gmの範囲が適当。しかし各季降雨少く乾燥のつくこともあるので、このことを考えに入れば3~6gmの木子を使用すべきであろう。

2. 栽植距離試験

材料及び方法 供試品種 ウエッジウッド (宮崎産) 試験区の構成は成績表記載、耕種法は次の通り。

試験年次	供試木子重 (gm)			植付月日	植付の深さ (cm)	収穫月日
	大木子	中木子	小木子			
昭33	4.5~5.5 平均 4.9	3.2~3.8 3.5	1.1~1.8 1.5	10. 5	12	5. 14
昭34	4.3~4.6 平均 4.5	2.6~3.7 2.9	1.4~1.7 1.5	9. 19	12	5. 6

成績及び考察 (第5表, 第6表) 昭32は普通, 昭34は冬季降雨少く球の肥大がやや不良であったが, 兩年とも成績は同じ傾向を示したのでここでは簡単に兩年の平均値を掲げることとした。

(1) 地上部の生育は, 粗植になるほど葉数は増加するが, 草丈では栽植距離による差は認められない。

(2) 球の肥大は, 大木子及び中木子の場合 9×12 cm区が最もよく, 3等級以下の小球歩合も少ない。それ以下では密植の害が現われて肥大が充分行われない

第5表 栽植距離と草丈及び葉数の関係*

	種球の 大小	栽 植 距 離 (cm)				
		6×6	6×9	9×9	9×12	12×12
草 丈	大	94.1	101.5	98.4	96.3	100.0
	中	94.1	95.0	95.5	96.2	91.6
	小	79.4	82.0	76.6	76.8	80.3
	平均	89.2	93.2	90.2	89.8	90.6
葉 数	大	3.9	3.9	4.2	4.4	4.7
	中	3.6	3.8	3.6	3.7	3.7
	小	2.7	2.8	2.6	2.7	2.8
	平均	3.4	3.5	3.5	3.6	3.7

(註) * 昭33・34の2ヶ年平均値, 兩年とも3月30日調査。

第6表 栽植距離と球の肥大との関係*

種球の 大小	栽植 距離	肥大 率	等 級 別 割 合			1株当木子収量	
			特以上	1~2	3以下	個数	重量
cm		%	%	%	%	gm	
大 木 子	6×6	3.8	11.6	61.1	27.3	3.4	11.3
	6×9	3.9	9.2	66.2	24.6	3.5	12.3
	9×9	4.2	13.0	74.6	12.4	3.8	14.1
	9×12	5.2	29.9	65.9	4.2	4.2	18.1
	12×12	4.7	26.9	62.2	10.9	3.8	15.6
中 木 子	6×6	5.1	1.4	66.5	32.1	3.6	10.6
	6×9	5.1	2.1	58.3	39.6	3.6	10.1
	9×9	5.3	2.0	69.5	28.5	3.5	10.6
	9×12	6.0	7.2	72.1	20.7	3.9	13.6
	12×12	6.2	8.3	64.6	27.1	3.9	12.9
小 木 子	6×6	7.5	—	16.2	83.8	2.4	5.0
	6×9	7.7	—	17.0	83.0	2.5	4.4
	9×9	7.8	—	12.5	87.5	2.3	4.5
	9×12	7.7	—	18.4	81.6	2.3	4.6
	12×12	7.6	0.7	18.3	81.0	2.9	5.3

(註) * 昭33・34の2ヶ年平均成績。

し, それ以上粗植にしてもその割合に効果は上らないようである。小木子の場合は明らかな差はみられなかつた。

(3) 以上の結果から, 最適栽植距離は普通の木子で, 9×12 cm, 小木子の場合はそれよりややせまくすることが適当と考えられる。